

ういろう売り

拙者親方と申すは、お立合の中に、「ご存じのお方もござりましようが、お江戸を発つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお出なさるれば、欄干橋虎屋藤衛門只今は剃髮致して、円斎と名のります。元朝より大海まで、お手に入れまするこの薬は、昔ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取りいだす。依つてその名を帝より、とうちんこうと賜る。すなわち文字には「頂き、透く、香い」と書いて「頂透香」と申す。只今はこの薬、殊の外世上に広まり、方々に偽看板を出し、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、平仮名をもって「ういろう」と記せしは親方円斎ばかり。もしやお立合いのうちに、熱海が塔ノ沢、湯治にお出なさるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず間違いなされますな。お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬で「ういろ」。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、「ご存じない方には、正身の胡椒の丸呑み、白河夜船、さらば一粒食べかけて、其の気味合いをお目にかけましよう。先ずこの薬をかうに一粒舌の上にせまして、腹内へ納めますると、イヤどうも云えぬは、胃、心肺、肝がすこやかになりて、薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。魚鳥、茸、麴類の喰い合せ、其の他、万病速効あること神の如し。さて、此の薬、第一の奇妙には、舌のまわることとが、銭ゴマがはだして逃げる。ひよと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじや。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。アワヤ喉、さたらな舌に、カヤサ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あかきたなはまやらわ、おそとのほもよろを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、益まめ益米盆ごほう、摘蓼摘豆つみ山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米の小生がみ、縹子ひじゆす、縹子縹珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛、古栗の木の古切り口。兩合羽か、番合羽か、貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆、しっかわ袴のしっぽころびを、三針はりながにちよと縫うて、縫うてちよとぶんだせ、かわら撫子、野石竹。のら如來、のら如來、三のら如來に六のら如來。一寸先のお小仏におけつまずきやるな、細溝にどじよにより。京の生鱈、奈良生学、鰻、ちよと四、五貫目、お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ。青竹茶筌でお茶ちやつと立ちよ。

来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。武具馬具武具馬具三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具。菊栗菊栗三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。麦ごみ麦ごみ三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。あの長押の長長刀は、誰が長長刀ぞ。向この胡麻がらは、荏の胡麻がらか、真胡麻がらか、あれこそほんの真胡麻殻。がらびい、がらびい風車、おきやがれごぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもごぼして又ごぼした。たあぶばたあぶば、ちりからちりからつたつぽ、たつぽたつぽ一丁だこ、落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、五徳鉄きゅうかな熊童子に、石熊石持、虎熊虎きす、中にも東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合掴んでおむしやる、かの頼光のひざもととらさず。

鯛きんかん椎茸定めて後段なそば切りそうめんうどんか愚鈍な小新発地。小棚の小下の小桶にこ味噌がこ有るぞ小杓子持つてこすくつてこよこせ、おとと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚は走って行けば、やいとを摺りむく三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七ツ起きして、早天早々相州小田原とうちんこう、隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう、あれあの花を見てお心をおやわらぎやという。産子、這う子に至るまで、この外郎の「ご評判、ご存じないとは申されまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、臼杵すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目を弛して今日お出でのいずれも様に、上げねばならぬ売らねばならぬと、息せい引つ張り、東方世界の薬の元々、薬師如來も照覽あれと、ホホ敬つて、ういろうはいらつしやりませぬか。